

頑張り日本人

塚田 實

一九八七年から三年間ニューヨークに駐在した。一九八九年には、三菱地所がロックフェラー・センターを買収するなど、バブル真最中の日本の勢いは止まらず、日本人はマンハッタンを肩で風をきって歩いてきた。ところが一九九〇年代初頭からのバブル崩壊から「失われた二十年」を経て、世界における日本の経済地位は低下し、アメリカの日本人駐在員や留学生数も減少の一途をたどった。日本人の存在感が小さくなっていったのは、元駐在員としては寂しい思いだったが、それでもまだまだ多くの日本人が学び働いている。

今アメリカは新型コロナウイルスと懸命に戦っている。トランプ前大統領は自身のコロナ対策遅れを覆い隠すかのように、新型コロナウイルス感染症を「チャイナ・ヴァイアラス」と断定する発言を繰り返し、反中国の国民感情を煽った。その影響もあるのか、アメリカで日本人を含むアジア系の人たちを対象にしたヘイトクライム（憎悪犯罪）が増え、大きな社会問題になっている。安全が脅かされている日本人女性はマスクと帽子で顔を覆い、アジア人であることを隠して通勤通学するという。

そんな気の滅入るニュースの多い中、マスターズ・トーナメントでの松山英樹の優勝はコロナ禍での明るいニュースとして、日本中を沸かせた。松山が控えめな表情で十八番のグリーンに上がってきたとき、パトロンが全員スタンディング・オベーションで日本人のチャンピオンを迎えてくれたのも嬉しかった。

松山の優勝とともにアメリカ・メディアで称賛されたのは、早藤将太キャディーの振る舞いだった。彼は、優勝を決めた松山と抱き合った後、ピンを十八番のホールに戻し、帽子を取ってコースに向かって一礼したのだ。激闘を終えた後、自然に出た行為は、日本人の礼儀正しさを端的に表しているとアメリカのSNSで広がりを見せた。

全世界で異人種・異文化への尊敬と理解が深まってほしい。ヘイトクライムなど絶対にあってはならない。